九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

経済学への提議(2)： 基礎的諸概念の再検討

友岡, 学

https://doi.org/10.15017/2920532

出版情報：経済論究. 12, pp.38-56, 1963-01-24. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

経済学への提議（2）

——基礎的諸概念の再検討——

友　岡　　学

目　次

1．そ の 序 章
〔1〕一つの科学——マルクスの「手稿」にふれて
〔2〕起源論的命題——有と無の間
〔3〕悪循環——人類起源論に関して
2．自然主義と人間主義
〔4〕時間と空間
〔5〕個体と類
（以上，鹿児島県立短期大学商経学会「商経論叢」11号）
〔6〕物質と非物質
〔7〕進化と非進化
（以上，本稿）
3．労 働 と 生 産
〔8〕ヒトの労働と動物の労働
〔9〕代謝ということ
（以上，鹿児島県立短期大学「紀要」13号）
〔10〕ヒトの労働のモデル
〔11〕生産物の概念
〔12〕労働と生産の諸形態
（以上，鹿児島県立短期大学「紀要」14号に発表予定）

ここに示されている特異な思考様式に馴染むためには，本稿に先立つ部分を参照していただくことが必要である．特異性のゆえに，時を接して，あるいは，できるなら同時的に，全体を発表せざるを得ず，しかもそのための機会が都合のよい形で与えられていないので，かくは分散的に（発表誌をかえて）出すことを余儀なくされた．この間の事情を察して諒としていただきたいと思う．

〔6〕物質と非物質

「物質」についての唯物論的見解は，レーニンの定式に帰一しているようである．したがつて，さし当り，レーニンの言う所を聞こう；

A命題：「哲学的唯物論がそれを認めることに結びついているところの，物質の唯一の『性質』は，客観的実在であり，吾々の意識の外に存在する，という性質である．」（永田広志訳『唯物論と経験批判論』白楊社，382ページ，傍点は友岡，原文の傍点は省略）　また；

B命題：「物質とは，吾々の感覚器官に作用して，感覚を惹き起すところのものである．物質は吾々に感覚において与えられている客観的実在である．」（同，200ページ，傍点は友岡）

言葉の詮議になるが，レーニンが再々附け加えている「吾々」とは一体誰のことか？　一人称単数を複数で表わす用語法に従つて，それはレーニン自身か？ それとも，唯物論者か？ あるいは，観念論者をもふくめて，ヒトみなすべてか？　「吾々」がレーニンをふくめた唯物論者であるとすれば，観念論という意識的なものもまた，唯物論者の意識の外に存在する客観的実在である．だから，それは唯物論者にいまいましい感じを起させ，それに対する斗争を喚起させるものである．それとも，「吾々」唯物論者の感覚器官に作用していまいましい感覚を惹き起すのは，観念論という意識的なものではなく，観念論者という・「吾々」唯物論者の外に存在する・客観的（肉体的）実在であるというか？　だが，その場合には，斗争は，「理論」という意識的なものによつてではなく，力学的法則に従う「武器」という物質的なものをすれば足りよう．武器をもつてせずに，レーニンが『唯物論と経験批判論』をもつてしたのはなぜであつたか?!　それは，（レーニンにとつて）観念論が「有害」な「物質的」力をもつたからであろう．そうでなければ；意識は社会的存在によつて規定されるのであつて，逆に，意識が社会的存在を規定するのではない；ので，黙つて放つておけばよかつたのである．結局，「吾々」を唯物論者とすれば，観念論者の意識としての観念論は，「吾々」の意識の外に客観的に実在する「物質」である；ということになる．意識は物質である?!　（「理論」的武装！）

もし，「吾々」が「ヒトみなすべて」であるとすれば，いかなる意識もヒトの意識の外に存在する客観的実在でないだろう．なぜなら，そこでは，対象としての意識も，主体としての意識も，同一のものであり，主観的実在であるからである．あたかも，「私」の意識が，「私」の意識の外に存在する客観的実在でないのと同様である．あるいは，唯物論が唯物論者にとつて主観的実在で

あるのと同様である．ここに，ショーペンハウエルの主観がある．「他を認識はするが，他に認識せられる事のないのは主観である．」「主観は時間や空間のうちにあるのではなく，現識する（vorstellen をこの訳者はこう訳している—友岡）何れの者の中にも分別し得ない全体として存在する．」（姉崎正治訳『意志と現識としての世界』前篇，第一巻，改造文庫，6～7ページ）

ここでは，不具者（盲唖聾者）を殊更取り上げまい．ヒトは一般に限定された感覚器官しか持ち合わせていない．時には，動物のそれに劣りさえする．進化によつて感覚器官及び感覚能力が多様になり複雑になつた（同じことだが，進化の階程を高く進んだものほど，感覚器官及び感覚能力が高度化している）；と考えられもする（たとえば，機械論者ラ・メトリイは「感官の数が少なければ観念も少ない」と『人間機械論』岩波文庫，26ページで言う）が，最近の研究はむしろ否定的である．エルネスト・ボームガールは言う；「動物が進化するにつれて新しい感覚のための器官があらわれ，その結果感覚能力がゆたかになつてきたと想像する人もあろう．だが事実はそうでない．それでころか，刺激の範囲は原生動物においてもつともひろく，進化の結果いくらかそれが減少してさえいる．」（日高敏隆訳『動物の感覚』クセジュ，29ページ）　また，「人間の知的世界は，人間の感覚的世界とはまつたくべつなものである．前者は人間の抽象と論理的思考能力をそなえた高次の心的機能によつて，様相をかえ，また，たえまなくゆたかになり，広まつてゆく．後者はこれに反して，成人においてはもはや不変であり，統計的な変異こそあれ，年齢や人種をこえてやはり不変である．」（16ページ）

「吾々に感覚において与えられている客観的実在」が物質であるとすれば，感覚の範囲を越える物質はありえない．「感覚において与えられる」という表現自体が，感覚がなければ物質はない（感覚あつての物質である）ということを語る．すなわち，レーニンは，言葉こそ違え，物質とは「吾々」に感覚された客観的実在である；と言つているのである．だが，すでに述べる機会があつたように（〔4〕時間と空間を参照），「吾々」に感覚された太陽は，それが感覚された瞬間に（同時的に）存在する太陽ではなく，すなわち，客観的に存在する（であろう）太陽ではなく，主観化された太陽であり，太陽の像である

に過ぎない．そしてまた，唯物論者によれば，客観的実在は，「吾々」（の感覚）以前に存在するし，この像が意識と見做される．すなわち，レーニンは言う；

C命題：「観念論哲学の信奉者からの唯物論者の根本的相異は，感覚，知覚，表象および総じて人間の意識が客観的実在の映像と見做される点にある．」（同書，393ページ，傍点は友岡）

A，**B**及び**C**の諸命題から学び取ることができるのは何か？　**A命題**によれば，物質は意識とは無関係に，その外に存在する．**B命題**によれば，物質は感覚にとらえられたものであり，感覚を越えるところには存在しない．この両者が無矛盾的に成り立つためには，意識と感覚とを別ものとしなくてはならぬ．だが**C命題**によれば，感覚は意識に包含される．外ならぬレーニンの諸命題から，物質あつての意識，意識あつての物質が，全く同等に，同資格的に，言われ得ることを知り得た．ここでは，勿論，一次と二次の区別などは無意味である．なぜ無意味であるかは，上述の言い方が語つている．そして，これこそが，恐らく，弁証法的対立の在り方であろう．レーニンが「弁証法の諸要素」としてあげているもののうち，つぎのものは，最も基礎的であろう．そして，少なくとも，それは対立者相互の間に一次と二次との区別をつけては成り立たない．「対立物の統一だけでなく，あらゆる規定，あらゆる質，あらゆる特徴，あらゆる側面，あらゆる性質は，それぞれの他者（その対立物？）へ移行する．」（松村一人訳『哲学ノート』岩波文庫，1の220ページ，傍点は友岡）　物質が一次的実在であり，意識が二次的なものであれば，両者の関係は弁証法的対立ではない．そして，そこにこそ，唯物論の根拠がある．もし，両者の関係が対立であるとすれば，観念論が唯物論と同資格的に存在理由を持つことになる．非対立的な関係が物質と意識の関係，「自然」と「人間」の関係（自然あつての人間であるが；人間あつての自然ではなく；自然は人間に転化するが；人間は自然に転化しない）に限定される限りは，唯物論はなおみずからを慰めることができるが，非対立的関係が弁証法で言う対立的関係とされるにいたつては，弁証法自体が泣き出さねばならぬ．すなわち，毛沢東の言う「矛盾の主要な側面」と「副次的側面」というのがこれである．（『実践論・矛盾論』国民

文庫，82ページを参照）　主要な側面は，意識に対する物質の如くいわば一次的実在であり，副次的側面は，物質に対する意識の如くいわば二次的実在である．だが，これは事物の矛盾の在り方であるというよりも，むしろ，論理の矛盾であるように思われる．

第一に，独立者の一方が一次的実在であり，他方が二次的実在である場合には，およそ対立者の相互転化・相互移行はあり得ない．レーニンが正しくも言うように，対立者のあらゆる規定…が（一次的，二次的という・その規定さえもが）相互に移行する；というのだから，一次的なものが二次的なものになる時に，二次的なものが一次的なものになるはずである．レーニン自身が例として挙げ，毛沢東もまた引用している弁証法的対立（数学では一プラスとマイナス，微分と積分，力学では一陽電気と陰電気，化学では一原子の化合と分解，社会科学では一階級斗争）のどれをとつても，先後関係や一次，二次の次元関係をつけられるものでないのは余りにも明瞭である．

このことがレーニンを迷わせたらしく，唯物論への執着から（というのは，唯物論なくしてはマルクス主義もないから）彼は，対立に一つの例外を認めざるを得なかつた．このレーニンの迷いは，またマルクス及びエンゲルスの晩年における迷いと同じものであつた．「もちろん，物質と意識の対立も，ただ極めて制限された領域の限界内においてのみ，即ち今の場合では，専ら何を一次的なものとし，何を二次的なものとするかの認識論上の根本的問題の限界内においてのみ，絶対的意義を持つものである．」（『唯物論と経験批判論』203～204ページ）　（認識論は，その限りでは，弁証法的ではありえない．）このレーニンの例外は，エンゲルスの1890年ブロツホにあてた手紙の文章と符号する．「これらすべて（政治上，法制上，哲学上の理論等々—友岡）の契機の交互作用があつて，その中にあつて，経済運動が無限に多くの偶然性を通じて必然的なものとして自己を貫徹する．」一方では一次的なもの（「自然」）と二次的なもの（「人間」）という「自然」の「人間」に対する先時性（先行性）を認めながら（唯物論の要請！），他方では，両者の同時性（弁証法の要請！）を認めようとする・矛盾する論理の上に『資本論』が成り立つていることは，すでに指摘されたところである（〔2〕起源論的命題参照）．ここでは，自然と

人間の同一性，自然主義と人間主義の同一性（若きマルクスの天才的直観！）は失なわれる．すなわち，事物は物質であり，事物の内的対立は物質の内的対立であり，弁証法の言う対立は物質そのものにあるのであつて（したがつて，物質のみの世界！）物質と意識の間に（相互を対立物とする）対立があるのではなく，物質と意識とが統一的に・対立しながら・世界を構成しているのではなくなる．そこで，「自然」は意識のない物質世界であり，経済（社会）は精神のない物質的生産に閉じこめられ，精神のない肉体が労働し，（奇妙なことに）肉体のない精神も労働する．

今や，つぎのことは明瞭である．唯物論は，正に唯物論のゆえに，物質と意識(精神等非物質)の弁証法的対立を見ることはできない．だから，弁証法は，唯物論的である時に，それが観念論的である時と同様に，弁証法であることをやめて，形而上学になる．唯物論のみが弁証法を独占し，「一の定式に変つて，他のより正確な，より完全でより深遠な定式が生れるということは，唯物論の敵が説教するように，決して弁証法的唯物論を反駁するものではなく，何から何まで弁証法的唯物論と合致している」（ソ連邦百科大辞典；広島定吉訳『弁証法的唯物論』新興出版社，204ページ）と，一切の真理まで独占すると考える者には，彼らの始祖がそこから引き出した弁証法と観念論との結びつきの理由は，全くもつて問題にさえならない．唯物論者にとつて残念なことに，観念論もまた唯物論と同じ程度に真理を語る．理由は簡単である．物質あつての非物質（意識，精神）であるのと同様に，非物質（意識，精神）あつての物質であるからである．

その第二は，具体的な例で示されよう．「自然」と「人間」の関係は，前者が後者に対して一次的であるという限りでは，物質と非物質の関係に対応する．しかし，唯物論者は，「自然」と「人間」の対立的関係は認めようとしながら，唯物論者であるがゆえに，物質と非物質の対立的関係は頑固に認めようとしない．（「自然」と「人間」の対立的関係を認めようとする例は，使用価値と価値との対立である．）だが，真に奇妙なことに，「自然」と「人間」との関係においては，毛沢東の言う主要な側面と副次的な側面との関係が逆転するのである．唯物論的に言えば，「自然」が一次的実在で，「人間」が二次的実

在であるので，意識や精神が物質に規定されるのと同じく，「人間」が「自然」に規定され，「自然」が「人間」に対して能動的である；と考えることこそ筋が通るというものである．ところが，この関係においては，「人間」こそが主体であり，「自然」は客体であり，「人間」が能動的に「自然」に働きかけるのである．どこで脱線したのか？

この見解は，「人間」自体（私の用語で言えばヒト）が主体としての精神的意識的存在であり，同時に客体としての肉体的・物質的・存在であり，物質と非物質がそこにおいて対立的に統一している；という見解とは無縁である．客体としての「自然」は，外界であつて，「人間」自体はそこから独立して社会を形成する；と考えられているのである．

物質と結びつけられている運動について若干言及しておこう．次の節でも触れられる．唯物論者においては，物質が絶対的であるのと同様に，運動も絶対的である．運動のない物質はないし，物質のない運動はない．あたかも，主語と動詞（述語）の間柄である．だが，不幸なことに，日本語では，形容詞もまた述語たり得る．エンゲルスは，「運動は物質なしには思考され得ない」と言う．レーニンもまた，「物質なき運動は思考され得るか？」と言う．だが，物質も運動も思考とは関わりはなかつたのではないか？　ここにも，思考された物質，思考された運動がある．そうであれば，同様に，思考された非物質（精神）や静止も存在する権利を持つだろう．ちようどその言葉が存在する権利を持つように．だから，「運動は物質なしには思考されえない」と同様に，「運動は非物質なしには思考されえない」と言えるし，また言わねばならないだろう．ところが，唯物質論者は，非物質（精神）は認めるが，運動の対立者としての静止は認めない．「静止」に対しては，唯物論者の思考は静止する．

これまでの物質は，哲学的に考えられた物質であるが，物理学で言う物質とは別ものなのか？　ロジエ・ガロデイーは言う；「一方には物質とはなにかという問題がある．…他方には，物質とはどんなあり方をしているかという問題がある．」（森宏一訳『認識論』上，32ページ）　前者は哲学の・後者は科学の・問題である．この場合，物質そのものは，両者において同一の概念である．

こうも言う；「物質の構造の問題は物質と意識とのあいだの関係の問題と混

同されてはならないということは，物質の二つの概念，すなわち変ることのない哲学的概念と歴史のうつりかわりにゆだねられる科学的概念とがあることを，すこしも意味してはいない．」（同32ページ，傍点は友岡）　だが，「物質は運動する」というのは，物質のあり方の哲学的規定ではなかつたか？　エンゲルスは言う；「運動は物質の存在のしかたである．」（『反デューリング論』選集14巻153ページ）　それも，この規定は科学的なものであるか？　「哲学は物質の他の諸特性を無視しはしない」（ガロデイー，同32ページ）　と言うが，「自然科学は物質のこの特性，すなわち客観的実在であること，すべての他の特性をきめるところの特性の承認を前提している」（同，32ページ）　か？

ガロデイーにとつてそしてまた唯物論者にとつて不幸なことに，武谷三男氏は，哲学的物質と科学的物質とを区別する．「物質と場という二つの根本的な概念は，現在のもつとも本質的な対立した概念であつて，ちようど以前の波動と粒子という二つの対立した概念が量子力学をつくり上げたように，現在の理論のもつとも本質的な問題である．」そして，「物質」に註記して言う；「ここにいう物質とは何ら哲学的な物質概念ではない．すなわち，唯物論のいう意味の物質ではない．これは物理学者の慣用語であり，場の source（源）となる粒子，たとえば電子，陽子，中性子，荷電中間子その他である．」（『続弁証法の諸問題』「物質と物の対立」177ページ，傍点は友岡）　唯物論者である武谷氏は，唯物論に対して遠慮しているようである．遠慮していることによつて，唯物論そのものの物質観から離れない．そのために，弁解的に，科学的物質を，一つの慣用語に帰せしめる．しかも，それが場とともに「もつとも本質的な対立した概念」である．何も，唯物論に対して遠慮する必要はなかつたように思われる．

「物質の不滅性」もまた，唯物論者においては絶対的である．レーニンは言う；「『物質は消滅する』——とは，吾々が今まで物質について持つていた知識の限界が消滅し，吾々の知識がより深く進んでゆくことを意味する．」（『唯物論と経験批判論』382ページ）　だが，「物質の不滅性」——とは，物質についての「吾々」の知識の限界が凍結して，知識が停滞していることを意味するだろう．なぜなら，「吾々の知識がより深く進んでゆく」ことの結果，今や

ふたたび，物質の不滅性に対する信仰が揺いでいるからである．大百科辞典の「物質」の項にはこう書かれている；「物質の最も重要な特性と見られていた不生不滅という性質（光は吸収されまた新しく放射されるので不生不滅の性格をもたない）も，陽電子の発見以来，きわめて不安定なものとなつた．すなわち，電子と同じ質量，同じ大いさの電気量をもち，ただその電気量の符号だけが異なる陽電子は，負の電気量をもつ通常の電子と合体して，両者ともに消滅しγ線（電磁波）となる．またこれと逆の過程，すなわち一対の電子と陽電子とが同時に発生する過程もある．このように物質は消滅しまた創生されるのである．」（因みに，レーニンも陰電子と「陽電子」について語つている<382ページ>が，彼の言う「陽電子」は，今日の陽電子ではなく，核子（特に陽子）のことである．陽電子が発見されたのは，1932年であつた．）大百科辞典は，物質の非物質化，非物質の物質化について語つている．それでは，不滅性理論と必滅性理論のいずれが正しいのか？　それに対しては，両方とも正しく，両方とも誤まつている，と言わねばならないだろう．ただ，両者を切りはなして，一方のみが真理である，と言う時には，それは完全に正しくない．

唯物論的不滅性理論は，結局のところ，物質を，口をすつぱくしてそれと結びつける運動概念的にではなく，静止概念的に見ている．ロジエ・ガロデイーは言う；「運動とは…変化一般である．」（83ページ）変化！　物質があれこれ存在するしかたは，物質そのものの変化ではない．物質が存在するということ，そのことは不変である．すなわち，存在する物質は，ただそれが存在しなくなることによつてのみ変化すると言い得るので，不滅性理論からすれば，当然絶対静止のうちにあることになる．（この「静止」を運動の特殊なばあいとする<ガロデイー，89ページ>見解については，後で言及する．）

さて，場が物質に本質的に対立する概念であれば，場は非物質である．この「場」概念はなかなかむつかしい．ここでは場は，非物質の物理学的概念だと言う外ない．場は，物質を粒子的に存在させる空間であり，逆に，物質は，場を波動的に存在させる時間である．これを最も抽象的な形で表現するものが，wavicle としての素粒子である．素粒子は，それ自体，物質であり，かつ非物質である．数学的には，座標軸によつて構成される空間が非物質としての場で

あり，任意の点Pが物質である．P自体は何らの空間的表象を持たない．時間そのものである．原子は，陽子，中性子，電子等から構成される．構成されたものは，構成するものとは別ものである．単に別ものというよりは，それを否定する．だから，原子という個体は，それを構成する個々の粒子のそれぞれの性質の寄せ集められた性質とは異なる特異な性質をもつ．原子はさらに分子によつて，その個体性は否定される．原子は，種類の異なつた粒子の関係のうちにある．その関係の空間的表現が，さしあたり，諸粒子の場である．だから，原子は粒子に対しては非物質的に場として意味をもち，分子に対しては物質的に粒子として意味を持つ．マルクスは言う；「動物はなにものにたいしても『関係し』ないし，一般に関係というものをもたない」（『ドイツ・イデオロギー』選集1巻，27ページ）これはよく不用意に引用される．今日における生態学の方向については，すでに触れるところがあつた（〔3〕悪循環を参照）．関係という場合，時間的なものと空間的なものを区別する必要がある．「世代」という生物特有の概念は，すぐれて時間的概念である．親と子という関係である．だから，生物においては，場は時間的概念である．逆に，生物では，「物質」とみなされる個体（生体）は空間的に，特定の標識を表象して（自己同一的に）存在する．無生物では，物質は，単純に質点として，空間性を捨象され（非自己同一的に）ただ時間性においてのみ把握される．すなわち，生物は無生物の否定された存在であり，無生物を自然とすれば，生物は非自然ということになる．逆に生物を自然とすれば，無生物は非自然ということになる．どちらを選ぼうと自由だが，いずれにしても，それは，生物を無生物とともに「自然」と呼び，生物学を「自然」科学と呼びならわして来た慣習とは相容れない．T．H．ハックスリは言う．「ところで生命を研究する者には，自然の見地が逆である．」（小泉丹訳『科学談義』岩波文庫，35ページ）だが，落胆するのは早かろう．生物と無生物の区別が明瞭でない（次節）ことは，無生物に生物性が，生物に無生物性があることを意味する．後者はいいとして，前者（無生物の生物性）は，生物の人間性ということと同様に，恐らく抵抗感なしには受け容れられまい．

ヒトでは，一面において，世代の区別は無意味である．（そして，この無意

味である限りにおいて人間である．）ガストン・ブートウールは言う；「社会（「人間」とおきかえてよい——友岡）の場合には，継続する世代ということばもげんみつな意味では使えない．人間では世代はかさなりあつているからである，大部分の哺乳類の特徴をなす出産の規則性というものが，人間にはない．ウシやウサギやヒツジは一年の一定の季節に子どもを産む．が人間ではそうでない．」（日高敏隆訳『社会生物学』クセジュ，19～20ページ）　この性格は，ちようど無生物に対応する．粒子の寿命は，類的にのみ，半減期という蓋然性において測られる．ある粒子が消滅し創生するのは，もちろん時期に限られない．世代の関係は時間的であるが，ヒトの場合も，その人間としての側面においては，世代の関係は空間的関係，無差別な個体と個体の並存する関係に外ならない．この面では，ヒトは無生物的であり，自然的である．また，いわゆる下等な（無生物に近い）生物ほど，その発生が季節に限られないということが注意されるべきであろう．

ヒトでは他の一面において，ガストン・ブートウールが続けて言うように，（ただし，彼はそれをただ附け足しているだけだが）「社会学上，時代の長さを何代と世代の数で数えるのは，君主制のにおいのする一種のお話で，われわれが歴史学上それに慣らされているからにすぎないのだ．」（同，20ページ）世代の区別は，「君主制のにおいのする」所有と相続に関わる．所有は，相続とともに，「社会関係」として考えられているが，「社会」がもし空間的な関係を意味するなら，それは正しくない．所有も相続も，人間的（自然的）関係ではなく，すぐれて生物的（非自然的）関係である．

〔7〕進化と非進化

「進化論」はチャールズ・ダーウインの名と結びつられているすぐれて生物学的理論である．だから，無生物の進化という場合には，進化論的な考え方の無生物への適用，ということになる．（早川幸男「生成し発展する宇宙」「自然」1960・9，25ページ）

「進化」という言葉は「19世紀に於ける科学思想を占有した不思議な言葉であつて，20世紀の今日，猶我々を魅惑する言葉」（大島豊『宇宙論』175ページ）

である．「進化論」「進化主義」「進化思想」等々で表現される思想が時代思想となつたのは，19世紀を遠く遡ることはない．ダーウイン以前に，全く畠ちがいの感があるが，ゲーテは進化論の有力な先駆者としての業績を誇ることができた．1786年に，比較解剖学の立場から，上顎の間骨が動物と同じくヒトにも認められることを説いたのである．エツケルマンとの対話のなかに，1830年のキユヴイエとサンテイレールとの有名な論争に大きな関心を示した一節がある．もつとも，ゲーテを進化論者として数えことを否定する見解もある．（八杉竜一『生物学』369ページ）　ここでは，ダーウインに先がけて進化論的方法で生物を研究した人々（18世紀ではチヤールス・ダーウインの祖父であるエラズマス・ダーウイン，ビユフオン，19世紀ではラマルク等）の思想史について語るところではない．ただ，チヤールス・ダーウインが『種の起源』で進化論を確立するに当つて，マルサスの『人口論』が大きな刺戟となつたとされていることは興味深い．（そのダーウインにマルクスが刺戟された！）

生物学が，記載「科学」から実験「科学」（又は説明「科学」）になつたのが19世紀の終りであるとすれば，進化論は，生物学の基本的学説である，と言える．進化論なしに生物学はない；という観を呈しているわけだが，しかしジヤン・ロスタンによると，非進化論の孤塁を守る学者が一人（？）ある．ストラスブール大学のルイ・ブヌール教授である．（寺田和夫訳『生命——この驚くべきもの』白水社，26ページ）　非進化論をじかに聞けないのは残念である．なぜなら，対立する学説はそれなりの存在理由があり，少数派が正しくないとは言えない；という一般的見解とは別に，非進化という概念を生物学が放逐することによつて，生物学は学として成立したかも知れないが，完成されないのではないか，と思われるからである．この非進化は，「進化の今日的段階」において対立する二つの学説の一つであるコールリー教授及びヴアンデル教授の「進化は今日死期に入つた，そして生物界はかつて多様化を導いた現象をもはや示さない」（ジヤン・ロスタン；同書34ページ）という非進化とは同一ではない．また私がここで言う非進化概念は進化論そのものの全面的な拒否のうえにあるのではない．だから，非進化論でもない．

今日の生物学の不思議なものの一つは，研究対象としての「生物」の概念が

あいまいであることである．物理学等々では，生物との対比において無生物を概念することはない．同様に，生物学では，（無生物との対比において生物を概念しようとはするが）ヒトとの対比においてそれをしようとはしない．『現代生物学講座』（1巻）は，その「生物学総論」で言う；「一口に生物といつてもその中に実にさまざまなものがあり，生物と無生物との区別はいつたいなんでつけるのかと開きなおられるとまつたく当惑する．生物と無生物とを区別する明確な基準というものはまだ与えられていない．生物の定義はまだ与えられていないのである．」（127ページ）

「ふつう生物と呼んでいるものは一般に次のような特徴をもつているといつてよかろう．

(1) 細胞からできていること，

(2) 個体として存在すること，

(3) 物質代謝のはたらきをすること，

(4) 成長すること，

(5) 外界の刺激を感受し，反応すること，

(6) 増殖すること．」（同，127ページ）

附言して；「これらの諸点はそのどれ一つをとつてみても，それが生物と無生物とを区別する基準とはなり得ない．それはこれらの諸点自身が明確に定義されたものでないことにもよるが，多くの生物の中にはこれらの特徴のどれかを欠いているものがあり，また明らかに無生物でありながら，これらの生物の特徴のどれかに似た振舞いをするものがあるからである．」（128ページ，傍点は友岡）同様な表現を用いると，生物（動物）でありながら，ヒトの特徴のどれかに似た振舞いをするものがある；ということができる．絶望的な告白は続く．あえて長々と引用するのは，この告白のうちに，当面の主題に関わる思想が暗示されているからである．

「生物であるために必要にして十分な条件というものはまだ知られていない．それで現在われわれは必要でもなくまた十分でもない条件に満足するほかにしかたがないのである．イギリスの生化学者 Pirieは lifeとか aliveとかいう言葉は無意味であるとさえいつている．ふつうわれわれが生物か無生物かをき

める場合には，直観的判断によることが多いが，これは経験に基くものである．」（130ページ）「人間的労働」とか「道具」とかによつて，人間（ヒト）を動物から区別して事足る「社会科学者」に比べたら，この告白は正直であると言わねばならない．つぎに，やはり人間（ヒト）と動物をつなぐ missing Link に相当するウイルスについても，同様のことが言われる．「一口にウイルスといつても，大型で化学的組成や構造の複雑なものから，小型で純粋な核タンパク質より成る比較的簡単なものに至るまでいろいろな段階のものがある．前者は比較的生物に近く，後者は比較的無生物に近い．」（137～138ページ，傍点は友岡）　ウイルスについては超微生物説と化学物質説がある．岡小天氏は，両説を紹介した後，こう言う；「ウイルスは生物と無生物との中間的存在と考えるのが適当と思われる．」（「生物と無生物との境」『現代自然科学講座』2巻，17ページ）

結局のところ，生物は無生物ではなく，無生物である；ということになり，それが言えるなら，無生物は生物ではなく，生物である；ということになる．さらに，この言い方に従えば，ヒトは生物（動物）ではなく，同時に生物（動物）である；とも，逆に，生物（動物）はヒトではなく，同時にヒトである；ということにならざるを得ない．とくに，「無生物は生物である」と「生物（動物）はヒトである」という言う言い方は，特に唯物論的見解にとつては奇異のことになる．こういう言い方が成り立つ事情は，窮極的には生物と無生物，生物とヒトの区別する境界が定かではない，ということにあるが，そのことは，恐らく，無生物には生物的な何かが，生物にはヒト的な何かが，それぞれ潜在していることを予想させる．

さて，「進化論」の無生物への適用というのは，無生物学には生物学の「進化論」に比すべき進化論がないことを，意味するが，「無生物が生物である」という上述の規定が許されるとすれば，「非進化論」の生物への適用ということも，同様の権利を有しなくてはならぬ．つまり，生物は無生物でない限りにおいて進化するのであり，無生物である限りにおいて進化しないのであり；逆に，無生物は生物である限りにおいて進化しないのであり，生物でない限りにおいて進化するのである．ヒトでは，無生物である限りにおいて進化し，生物である限りにおいて進化しない，ということになろう．このことはすでに認

められている．ポール・ショシヤールは言う；「人間の体は原初以来何一つ変つていない．違つたのは精神の働きだけである．」（吉倉範光訳『言語と思考』クセジュ，14ページ）　つまり，身体は進化せずに，精神が進化するのである．ここに，明らかに，ヒトが生物の否定された存在であることが説明されている生物の進化は身体においてであり，それ以外ではない．潜在する無生物性（人間性）は非進化と結びつくが，生物（動物）の精神の不変性もまた認められている．「動物が進化するにつれて新しい感覚のための器官があらわれ，その結果感覚能力がゆたかになつてきたと想像する人もあろう．だが事実はそうでない．それどころか，刺戟の範囲は原生動物においてもつともひろく，進化の結果いくらかそれが縮少してさえいる．なぜかというと，進化は反応の豊富化，生体の特殊な適応という方向にはたらいたのである．」（エルネスト・ボームガール『動物の感覚』日高敏隆訳，クセジュ，29ページ）（註）

（註）進化概念を「種」の進化に限定しないと，とんでもないことになる．たとえば，「人類の進化を考えるにあたつて，その形態上の変化の速度が，他の動物たちの進化の速度よりも早いことが常に問題となつていた．」（江藤盛治「ヒトの進化の系列」『現代人間学』1巻，156ページ，また同書所収田辺義一「ヒトの進化の特異性」204ページを参照）ここでは，明らかに，形態的な変化と進化を混同している．形態的な変化はホモ性を否定するものではない．ヒトにおいて形態的な変化が早く進行するのは，空間的には形態的変異の多様性として表現されている．つまり「この種が身体的な形質に於て著しい変異をあらわしているのは，飼養された動物をのぞけば動物界に比類がない．」（三森定男『人類学概論』72ページ．）なぜヒトにおいて著しい変異多様性があらわれるかということについては，すでに〔5〕個体と類で触れるところであつた．

進化と非進化に，生命と非生命とを結びつけるのは，生物には妥当するが，ヒトと無生物には妥当しない．すなわち，生物において進化するのが生命であればヒトと無生物では非生命であり，進化しないのが生物で非生命であればヒトと無生物では生命である．すなわち，生物のヒト化と無生物の生物化にあたつては，進化するものが進化しないものに，進化しないものが進化するものに生命が非生命に，非生命が生命に，それぞれ対立者に移行する．

進化が非進化と対立する概念であるという認識は，運動は静止に対立する概念であるという認識につながる．勿論，進化と運動の概念は異なる．進化という語は，「種の進化」と表現されるように，生物学的にはある類標識の他の類

標識への転換であり，不可逆的である．退化は進化の対立概念ではなく，進化の一形態である．不可避的に進化はある方向のうちに概念される．方向は恐らくヒトに向く．こうは言つても，進化の「系統」に端緒的位置をしめる原生動植物が，この「系統」をたどつていつかの日ヒトにまで達しなければならない；と言つているのではない．一元論に固執する必要はない．各種の生物は，それなりに人間性を持つ．そしてここに擬人主義の根拠がある．

今日進化は死期に入つた；というのは，人間の身体に関しては正しいにしても，生物一般に関してはどうかと思われる．今日では地球は生物の種に変異を来たすような変動を経験してはいない；というのが非進化論の根拠であるようだが，しかしそれはヒトの感覚的な時間のうちでのみそうであるのかも知れない．あたかも，直線がある曲線の極小部分であり，その直線だけからは，その曲線が2次曲線かsin曲線か分らないのと同様に．だが，そのことは措いても，ヒトがすでに実在しているということが，事実上，進化を無意味ならしめている；と考えられもする．生命の自然発生は，パスツールによつて否定されたが，しかし，生命は今日でもなお不断に自然発生しているが，既存の生命によつて食いつくされるので，それが観察されないのだ；という見方もある．食いつくされる；とは，余りにも現実的な表現であるが，つまり，生命は無生物の否定者としてすでに実現しているので，あらためての発生は無意味である；ということに外ならぬ．生物のヒト化が，ヒト自身において不断に行なわれているのと同様に，無生物の生物化が生物において不断に行なわれている．その逆の過程とともに，いわゆる「代謝」が行なわれる．むしろ，このように考える方が誘惑的である．

さて，運動を静止に対立させるのは，運動の絶対性を主張する唯物論的見解と衝突する．唯物論は，静止を運動の一形態だとしているからである．だが，運動は変化の一形態（位置の変化）であり，静止は不変の一形態（位置の不変）である；と考える方が正しいように思われる．エンゲルスは，「運動そのものが一つの矛盾である」ことを説いて，「すでに単純な力学的運動からして物体は同じ瞬間にある場所にあつて，同時に他の場所にあり，同じ場所にあつて，その場所にないという風にのみ行なわれる」（『反デューリング論』選集14

巻，241ページ，傍点は友岡）　と言う．これは運動の矛盾というよりも，説明の矛盾（あるいは論理の矛盾）である；ように思われる．一体ツエノンの説明とどう違うだろうか？　なぜなら，エンゲルスは言葉としては「静止」を使つていないが，運動を説明するのに静止の概念をもつてしているからである．「ある場所」「その場所」「同じ場所」等の表現は，静止する座標系を表現する以外のものではない．運動は，何かに対する位置変化であり，この何かがなければ，それを思考することさえできない．もし，運動する物体自体が一つの座標系であれば，その物体の座標系に対する関係は，静止以外の何ものでもない．汽車のレールが地球に対して静止しているのと同様である．地球は太陽に対しては運動している（その場合，太陽は地球に対しては静止する座標系の原点である）が，地球自体は（あるいは地球上の物体は）地球に対しては静止している．だから，エンゲルスの有名な定式「運動は物質の存在様式」には，限定的にのみ，同意できる．運動するものはすべて物質である；あるいは，物質は運動するものである；という命題が矛盾なく成り立つ時には——という限定である．すでに見たように，進化と生命を，進化するものは生命である，あるいは，生命は進化するものである；と命題的に結びつけることの無意味さを知つた．前の命題が成り立つ時には後の命題が成りたたず，後の命題が成り立つ時には後の命題が成りたたない．同様に，「運動は物質の存在様式」と言えるなら，「静止は物質の存在様式」とも言えよう．また，「運動は非物質の存在様式」「静止は非物質の存在様式」とも言える．ということは，これらの諸命題は何ごとをも語らないことを意味する．

生物学的な（と言うよりは，一般に）進化概念は，さきに指摘したように，類の標識転換であつた．種の内部に亜種が形式され，この亜種が種になる．無生物の場合にはそうではない．たとえば，ある元素（ある原子の類）が他の元素に転換するのは類標識の転換であるが，しかし，無生界でこれが行なわれているわけではない．類的な転換ではなく，個体的な転換である．だから，ある一個の粒子（a）が，他の一個の粒子（b）に転換したとしても，粒子集団（A）が，他の粒子集団（B）に転換して，Aが消滅してしまう；という事情ではない．この場合の進化は，物質の進化と言うよりは，場の進化と言うべきであ

る．だから，進化は空間的に行なわれ，空間の多様化，複合化として行なわれる．原子と言うも，分子と言うも，私たちにとつては，素粒が原子を構成する時間を，原子が分子を構成する時間を，等々を何ら顧慮するところではない．時間は，空間を表象するものとしてのみ意味を持つ．したがつて，無生界に於ては，空間はマクロ的には光年によつて，ミクロ的には寿命として表象される．素粒子の寿命と言われるものは，半減率として表現されるように，個々の素粒子の寿命ではない．ある集団のどの個体が消滅するかは，確認することはできない．生物の場には，寿命は個々の個体において確定的である．平均寿命100年で，その分布が0～150年であるとすれば，あらゆる個体は，150年以内には必ず死ぬ．生物である限りにおいて，ヒトもまた同様である．生者必滅は免れない．だが，ヒトが他の生物から区別される限りにおいて，すなわち，無生物的である限りにおいて，その寿命は不確定である．人は死して名を残し，死せる孔明が兵を走らせる．どの人がいつまで名を残すか，これは誰にも分らない．また，孔明がいつも兵を走らせるわけではない．同様に，マルクスがいつまでどの人の頭を支配するかは，これまた分らない．

生物の進化は，時間的に行なわれる．空間は，さし当り，地球の表面に限定される．しかし，これが私たちに表象される時には，種の地理的分布として空間化される．だから，種の進化のあとをたどるために時間を遡る必要はない．極端に言えば，無時間的に，空間のうちに見ることができる．ここに，生物学において占める「分類学」の比重の大きさの理由がある．井尻正二氏は言う；「（分類的な方法は—友岡）連続的であり，かつ絶えず変転の過程にある自然を，時間を極端に無視して，いわば時間を零とおく—固定する—ことによつて運動の一瞬の状態を静的にとらえるのである．」（『科学論』現論社，36ページ，傍点は友岡）　種の地理的分布に似たものは，ヒトにおいては，「発展の不均等」とか「ウクラード」とか表現されている異時間的なもの同空間的分布である．勿論，現在する種がそのままの形で，進化の系統のうちに時間的に配在されるわけのものでないのと同様に，たとえば，未開種族の形態がそのまま人類史の時間的な端緒に見られたわけのものではない．しかし，つぎのことは注意さるべきである．ヒトにおける異時間的なものの同空間的分布は，ホモとして

の類性を失なわずに行なわれているので，たとえば，アメリカ人とポリネシア人との，スペイン人とインデイアン人との，等々の交配が可能である．

ヒトにおける（生物のそれから）転位された進化の真実の原因は何であろうか？　進化は生物学的概念としては時間的なものであつたが，進化概念を空間にまで拡張しなければならないのを無生界について考えた．そこでは，恐らく，客観的には時間の空間化が行なわれ，主観的には（表象としては）空間の時間化が行なわれているのであろう．時間の空間化——それは労働による生産物の外在化に外ならぬ．時間的にのみつながる血の流れの外に，空間的につながる生産物の流れがあらわれる．そして，生産物の外在化の度合に応じて，生物はヒトである．生物の進化は，生物の種性の変化であり，自己の生体そのものの類的変化であるが，ヒトの進化は，生体そのものに代つて，生産物の変化になる．平たく言えば，生物は，環境に適応するためには自己の体を変えなくてはならないが，ヒトにおいては，体を変えなくて済み，体の外にあるものを変えればよい．生産物の多様化は，社会的分業の多様化・複合化であり，粒子的存在としての諸個体（諸個人）が存在する空間としての「場」（市場）の多様化，複合化である．「社会の発展」というのは，実に，場（市場）の進化を表現する　　（未完）

附記　目次に紹介しておいたように，以上の基底に立つて，従来の経済学が閑却して来た「労働と生産」の概念の検討に移る．その後に，人間性（自然性）と同意義でさえある「交換」が取り上げられる．かくて価値論（主観的及び客観的）と無価値論，価格論等々が新しく評価し直される基礎が築かれる．私の現在の関心が，一にかかつてそこにあることを表明するのは，「経済学への提議」と題して，余りにも「経済学以前」のことに関わり過ぎているという誤解を，予め避けるためである。御了解を得たいと思う。

（1962.12.18初校の折に）